

中国語母語話者の日本語作文における モダリティ表現について

魯東大学外国語学院 李 晨

Modal Use in essays by Chinese Learners of Japanese

LI Chen

要旨：文末のモダリティ表現に対する、日本語学習者（中国の大学生）の使用実態において、使用法や使用率に特徴がみられる。まず、よく使用する表現は「と思う」などの主観的表現であり、また使用率から習得過程の関係についてみると、日本語母語話者の習得過程と同様の傾向がみられ、学習が進むにつれて表現も多様化することがわかった。これには、さらに主観的表現を多用する中国語母語の影響から脱却して客観的な日本語式表現に移行している状況が看取できる。また使用の背景にある、中国語との対応とその影響、また指導法についても検討した。

キーワード：話者態度、学習段階、主観的表現 客観的表現

1.0 はじめに

言い表す内容である「言表事態」に対して、その事態に対する発話者の態度を示す「言表態度」は、日本語においてもモダリティ表現と称され多様に見られる。これらは、日本語を使用する際も不可欠であり、習得上重要な項目であることはいうまでもない。しかし、その習得ということになると、モダリティ

表現が多様であるのと比例して、様々な問題を呈していることはすでに指摘されているとおりである。例えば、市川保子（1997）にあるように、習得が十分でない例が目立ち、その誤用は多岐にわたる。本論では、このモダリティ表現の習得が、まずは中国人学習者においてどのように使用されているのかについて調査した結果をもとに、習得過程における特徴などを述べる。

ところで、モダリティ表現には、簡単に挙げると、言表事態「行く」に対して、(1)「行くだろう。」「行きなさい。」「行くか？」などの助詞助動詞を付加したり、(2)述語の活用形による「行け」、(3)副詞を付加する「多分行くだらう」、(4)感動詞による「えーと、行く…」、また(5)イントネーションによる区別「行く／行く？」、(6)間投助詞による「それでね、私ね」などもある。本論の調査では、このうち特に、(1)に関連する表現を取り上げた。

また調査にあたり、モダリティ表現の意味的な分類を行っているが、その分類には、例えば森山（1996）「(1)命題内容に対する話し手の判断のあり方を表すもの(2)聞き手に対する発話態度・伝達態度を表すもの」などがあるが、本調査においては、主に佐々木・川口(1994)の調査項目を参考にし、その分類に従っている。

ところで、モダリティの習得に関する研究については、すでに佐々木・川口(1994)の調査では、日本語母語話者と日本語学習者の文末表現の発達過程について指摘したものがある。その結果、「日本語学習者はモダリティ表現の使用が日本語母語話者と比べると少ない」こと、「日本語母語話者に関してもモダリティ表現は学年が上がるに従って、使用率が上がり、小学低学年では30%ほどの使用率が大学生になると60%ぐらいになる」という、母語話者においても学年が低ければ低いほど使用率が少ないことが指摘されている。また、モダリティ表現と中国人学習者については、張興・徐一平（2000）において、中国語の該当表現の指摘とともに誤用の傾向が示され、教授法の改善への提言がなされている。また、伊集院・高橋（2003）においてはさらに詳細に、日本人と中国人学習者の使用例の比較がなされている。

本論では、モダリティ表現の一部にとどまるが、これらの表現が、中国人学

習者においてどのように使用されるのかをまず調査し、前掲佐々木・川口(1994)、伊集院・高橋(2003)にみられるような学習段階(学習学年、レベル)の違いの特徴やまた各表現の使用頻度の特徴などを明らかにし、モダリティ習得における問題点とその改善方法についていささか考察したい。

2.0 中国語母語話者の日本語作文におけるモダリティ使用状況調査

2.1 調査方法と結果

本論は主に佐々木・川口(1994)による語尾化的分類を参考にし、禁止・命令・勧誘・必要の表現と当然性表現を加えて調査を実施し、作成したものである。

作文形式

- (1) 作文題目：前期 800字、「私の趣味」と「高校生活」の二作文。
後期 1600字「日本語学習と私」、2004年中国の大学二・三年生『日本語作文コンクール』の参加作文(日本語教師による添削無しの原稿)。
- (2) 作文執筆者：魯東大学外国語学院日本語科の大学二年生 30人、三年生 30人。

実施時期

第一回調査(前期) 2003年12月4日(二年生と三年生が同時)

第二回調査(後期) 2004年6月4日(二年生と三年生が同時)

以上の作文を資料として調査した結果は表1の通りである。

表1：中国語母語話者の作文における文末モダリティ使用頻度(魯東大学2004)

(()内は%。各時期(各列)の総回数に対する割合。小数点第三位四捨五入。)

表現類型	語例	中国語母語話者				合計(%)
		2年生(30人)		3年生(30人)		
		前期	後期	前期	後期	
説明の表現	のだ	43	14	129	78	264(16.5)
	わけだ	0	1	4	11	16(1.0)
主観的表現	だろう	12	9	22	37	80(4.99)
	まい	0	1	4	6	11(0.68)
	と思う	98	70	106	89	363(22.7)
	ことにする	4	12	2	1	19(1.16)

	ようにする	1	11	2	17	31(1.93)
	にちがいない	2	2	5	8	17(1.06)
客観的表現	ようだ	4	21	6	21	52
	かもしれない	12	13	8	21	54
	ことになる	5	17	2	11	35
	ようになる	14	11	15	25	65
	思われる	6	3	1	12	22
	言われる	2	9	2	13	26
	様態性表現 (類義表現)	らしい	1	3	7	11
ようだ		16	13	12	27	68
そうだ(様態)		5	5	14	13	37
みたい		0	2	3	6	11(0.68)
感嘆の表現 (文末助詞)	よ	2	9	3	8	22
	ね	26	10	9	19	64
	かなあ	0	2	8	11	21
禁止の表現	～してはいけない	9	6	22	16	53
命令の表現	～なさい	5	2	3	3	13
勧誘の表現	ほうがよい	15	9	11	13	48
	すればよい	7	6	14	10	37
当然性表現	はずだ	2	3	7	8	20
必要の表現	べきだ	5	7	16	11	39
	なければならない	19	16	31	27	93(5.8)
総回数		315回	287回	468回	533回	1603回

2.2 使用状況分析

表1の結果をもとに、以下次の5項目を中心に分析し、使用状況の実態を把握する。

- (1) 文末モダリティ表現の使用頻度
- (2) 文末モダリティ表現の使用類型別分析
- (3) 二年と三年の前期と後期の学習段階分析
- (4) 日本語母語話者との比較分析

なお、本論での、「中国語母語話者」は魯東大学外国語学院日本語科被調査者(二年生と三年生)を指す。

(1) 使用頻度

モダリティ表現の使用頻度から見れば、三年生のほうは二年生より使用頻度と文末様式の多様性が見られる。使用頻度のもっとも高いのは主観的表現の「と思う」で、全体の22.7%になる。その次には説明の表現の「のだ」は16.5%になり、必要の表現の「なければならない」は5.8%、「だろう」は5.0%になっている。使用頻度の少ないのは「まい」と「みたい」であり、それぞれ0.68%しかない。

中国語母語話者には注目されるのは「ようだ」「かもしれない」「思われる」などの客観的表現のモダリティよりも、「だろう」「と思う」などの主観的表現と「のだ」のような説明の表現のモダリティが多く使用されているということである。この点について、母語である中国語の表現様式からみると、母語においても使用しやすいかしくにくいという影響が想定される。例えば、中国語での対応表現は、「のだ」は“是...的”（肯定説明）、「と思う」は“我认为...”（判断主張）、「だろう」は“是...吧”（肯定推量）に対して、客観的表現の「ようだ」「かもしれない」「思われる」に対応する中国語は“似乎...”“也许...”“一般认为...”である。後者は、いずれも“委婉（婉曲）表現”であり、「私」のもつ「主張・判断・説明」のような強い訴えが弱まるようになる。「だろう」「是...吧」（肯定推量）は「と思う」と「思われる」との中間的な働きになっていると思われる。これらの中国語での“委婉（婉曲）表現”は一般的にあまり使われない。つまり、中国語でもあまり使わないことが影響し、日本語での使用例も多くはなっていないということが考えられる。習得上これらの中国語が念頭にあり、使用率に高低が出たのではないだろうか。

これらの結果をみると、いずれも「言表態度」よりも「言表事態」を認めるのが強いと考えられる。

(2) 表現類型

モダリティの表現類型から見れば、「説明の表現」の「のだ」と「主観的表現」の「と思う」には調査の前期は後期より多く使用されている。例えば、二年生

前期・後期の「のだ」と「思う」の使用回数は43・14と98・70になり、三年生前期・後期は129・78と106・89になっている。説明の表現の「わけだ」、主観的表現の「まい」、客観的表現の「言われる」、様態性表現の「みたい」、感嘆の表現の「よ」「かなあ」、当然性表現の「はずだ」の使用率が全体的に低かったが、必要の表現の「なければならない」、禁止の表現の「してはいけない」の使用は後期より前期のほうが多いし、また使用頻度も高い。これは作文のテーマとも関係があるのではないかと思われるが、このように早い時期から定着し使用されているのは、次のような中国語の対応例が明確であることに影響があることも考えられる。例えば、「なければならない」は「应该(要)・必須...」、「してはいけない」は「不可(不要) ...」であり、対応関係が比較的はっきりしている。日本語においても把握しやすい例といえる。

後期には主観的表現の「と思う」が前期より低くなり、客観的表現が前期より高くなる傾向が見える。学習段階の進歩から見れば、前項の中国語の“委婉(婉曲)表現”についてのところで述べたように、主観的表現を多用する中国語母語の影響から脱却して客観的な日本語式表現に移行している状況が看取できる。

(3) 使用時期

全体的に見れば後期は前期よりモダリティ使用頻度の変化がはっきりしている。三年生は二年生より使用頻度が高い。三年生では1001(62.4%)であるのに対して、二年生では602(37.5%)であり、三年生の方が圧倒的に多くなっている。

これについては、前掲佐々木・川口(1994)の「日本語母語話者に関してもモダリティ表現は学年が上がるに従って、使用率が上がり、小学低学年では30%ほどの使用率が大学生になると60%ぐらいになる」という指摘に関係する。学習者においても、日本語母語話者と同様の傾向がうかがえる。

さらに、時期によって、大きな変化が見られる表現類型は、「禁止の表現」「必要の表現」などの主観的表現である。

類義表現の使用率には二年生は主に「ようだ・そうだ」に偏ったが、三年生

は「らしい・ようだ・そうだ・みたい」「ほうがよい・すればよい」「わけだ・はずだ・べきだ」などの使用率の内訳には平均的な分布傾向が見られる。前期に使用率の低かった「わけだ」「まい」「かなあ」「ようにする」「はずだ」なども後期には使用頻度も上がったし使用率の内訳も平均的になることがわかった。

(4) 日本語母語話者との比較

ところで、以上の調査結果を、日本語母語話者の場合と比べるとどうなるのかについて、以下、表2の伊集院・高橋(2004)「中日作文コーパスにおけるモダリティの出現傾向」における調査結果及び分析と比較しながらみていく。

表2：中日作文コーパスにおけるモダリティの出現傾向（伊集院・高橋 2004より改編）

(JP は日本語母語話者、CN は中国人学習者)

語例	のだ	わけだ	だろう	にちがいない	ようだ	かもしれない	らしい	よ	ね	してはいけない	てください	ほうがよい	はずだ	べきだ	なければならない
JP	74	1	33	2	2	6	2	0	0	0	2	0	6	8	4
CN	7	0	17	0	5	7	0	5	8	5	10	6	9	30	15

伊集院・高橋(2004)の頻度表から見れば、感嘆の表現の「よ」「ね」の使用頻度には日本語母語話者より中国人日本語学習者は高い。類義表現の「ようだ」「らしい」は、JPは平均的に使用しているのに対してCNは「ようだ」に偏っている。「はずだ」「べきだ」「なければならない」の使用差も見られる。また勧誘・禁止・命令の表現の「ほうがよい」「してはいけない」「てください」と必要の表現の「べきだ」「なければならない」もCNは高頻度で用いている。

これは、本調査での中国語母語話者（魯東大学 2004）でも同じような傾向がみられた。およそ中国語母語の表現様式による影響が働いていると言えるだろう。すなわち「相手に向かって話しかけているような表現が多用されている」（伊集院・高橋 2004）ということの表れが確認できる。

ところが、傾向が異なる点は、CN の「のだ」の使用例数である。本調査では高頻度になっていたのに対して、ここでは CN に比べて JP のほうが高頻度になっている。では、本調査対象者がより日本人の使用法に近いかというところではない。これも作文のテーマとも関係があると思うが、この原因をさらに求めると、伊集院・高橋（2004）の指摘する使用方法にも関係があるように思われる。伊集院・高橋（2004）では、評価のモダリティ（「べきだ」「なければならない」「てはいけない」など）の使用例について、これらに「思考動詞や他のモダリティによって包み込んだ形式」としての「包括形式」についての分析がある。この形式は、CN より JP の方が圧倒的に多く、その質的な違いが指摘されている。今ここで問題とする「のだ」についての分析に全てが関係するとはいえないが、「のだ」もこれらのモダリティについて包括形式を形成することができる。そこで、本調査結果についてさらにみると、この包括形式に関わる「のだ」は 1 例もみられなかった。例えば、(1)人生の道に、生きがいに関するのだ。(3 年前期)

(2)このような消費状況は、ある意味では、社会全体消費によってきめるのである。(3 年後期)

のような用例ばかりで、他の形式と共に使う包括形式は見られなかったのである。つまり、このことから想起すれば、JP の使用例との質的な違いがやはり存在することが確認できる。これらの包括形式としての定着はみられず、学習者にとっては難しい点であることがわかる。その原因として考えられる一つは指導法であるが、本学で使用した教科書の問題を指摘しておきたい。後掲するのは、魯東大学日本語科の使用教科書および参考書の一部の例文と中国語訳である。例えば、

「わたしは肉がきらいなのです（我是不爱吃肉的）」『新編日本語』 1ⁱ

「食べる前には手を洗うのですよ（吃之前要洗手啊）『新編日本語』 3ⁱⁱ、

「日本は電子工学が進歩していますから、外国からの留学生が多いのです（日本电子工学发达因此外国来的留学生才多的）」『標準日本語』初級（上）ⁱⁱⁱ

「何をしていますのですか（你在干什么呢？）」「わたしも行きたいのです（我也要去）」『新日本語語法』^{iv}

などである。各用法の説明はあるが、包括形式による可能な表現形式の紹介は全くなされていない。このような点にこの調査結果の違いの原因があり、また指導上改善すべき点であることがわかった。

また、本調査対象と母語を同じくする CN の場合との違いについてであるが、これも作文のテーマに関係があると考えられるが、両者の違いは学習環境であり、習得方法に違いがあることが想起される。ただし、CN の学習環境の逐一については明らかではないが、使用する教科書などによっても異なるだろう。さらに、上記に挙げた教科書の説明においては、常に中国語訳との対応によって説明がなされている。特に本学の学生は、これらの中国語の対応例によって習得している可能性が高く、これによってかえって多用される結果になったとも考えられる。いずれにしても、用法の質的な差および習得方法に原因があると考えられる。

3.0 おわりに

以上のとおり、本調査の結果を分析してきたが、まとめとして本調査の問題点および課題を含めて記し、本論の結びとする。

中日話者のモダリティ使用率の比較によって中国語母語話者のモダリティ習得は日本語母語話者の習得順序などと一致しても、当該項目についてのとらえ方や母国語の影響などの要因もあることがわかった。本調査の作文においても、伊集院・高橋（2004）の指摘する、「相手に向かって話しかけている」ような主観的表現が多用されているが確認できた。

また、佐々木・川口(1994)で明らかにされた習得過程についても、本調査の対象者の習得過程は日本語母語話者の習得過程に似ていることが確認できた。

低学年から高学年へ上がるとともに主観的モダリティの使用から客観的モダリティへ移行し、使用するモダリティの表現形式も、重複率が減少して使用率の内訳が平均的に分布するようになる、つまり多様な表現が出来るようになることがわかった。このことから、指導の際、初級段階ではその習得が難しいが、なるべく早い段階で、様々な表現形式を学ぶことによって、より豊かな表現が実現できるようになると考えられる。

いずれの形式についても、すでに述べたとおり、作文のテーマに関わる場合が多く、これらを考慮しなければならない。また、中国語母語の表現式による影響があることは言うまでもない。特に「のだ」の多用についても、他の表現における包括形式の使用状況も検討し、さらに中国語との対照を重ねながら考察を加えていきたい。また学習環境の違い、指導法、教科書の問題については、本論では予想にとどまるが、さらに調査を加えるとともに、先行研究にみられる調査を参照しながら検討していきたい。また、木村英樹・森山卓郎（1992）で取り上げられている「聞き手情報の配慮」の問題についての検討も加えたい。

今回取り上げなかったモダリティの表現形式についても調査することによって、さらにモダリティ表現の習得について、全体的な状況を把握した上で検討を加える予定である。特に、益岡隆志（1991）の説明の通り、モダリティ表現は重層構造をもっている。先にみた包括形式とともに、広く重層構造が実現できているかどうかの状況も把握しなければならない。このような実態調査を重ね、より自然な表現ができるような効果的な指導方法も考察していきたい。

注

ⁱ 『新編日本語』（1），第13課，「事実・理由・根拠または必然的結果の強調」．p242.

ⁱⁱ 『新編日本語』（3），第8課，「要求を表す・禁止，命令に近い表現」．p171.（『新編日本語』（1～4），魯東大学2001～2004一，二年生の使用教材）

ⁱⁱⁱ 中日交流『標準日本語』初級(上)，第23課，「事実の肯定と必然の強調」．p328.（魯

東大学の第二外国語用教材)

iv朱万清 編『新日本語語法』(上), 外語教学与研究出版社, 1998 年版.

参考文献

1. 市川保子『日本語誤用例文小辞典』1997年, 凡人社.
2. 森山卓郎「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3:モダリティ』岩波書店, 2000.
3. 佐々木泰子・川口良「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」. 日本語教育学会編『日本語教育』84号, 1994.
4. 張興・徐一平「中国人学習者の作文における命題目当てのモダリティ表現について — 中国語との対照を含めて—」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築 研究成果報告書』2000年.
<http://www2.kokken.go.jp/~smudr/public/sakubun/docs/zx.pdf>
5. 伊集院郁子・高橋圭子「文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility”—中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」, 日本語教育学会編『日本語教育』123号, 2004.10
6. 中日交流『標準日本語』初級(上), 人民教育出版社, 2004年版.
7. 周平・陳小芬『新編日本語』(1~4), 上海外語教育出版社, 2001年版.
8. 朱万清 編『新日本語語法』(上), 外語教学与研究出版社, 1998年版.
9. 木村英樹・森山卓郎(1992)「聞き手情報の配慮と文末形式—日中両語を対照して—」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』くろしお出版 pp3-43
10. 益岡隆志. 『モダリティの文法』くろしお出版, 1991.

あて先: 山東省烟台市芝罘区世学路184号 郵便番号: 264025

魯東大学外国語学院日本語学部 李 晨

電話・ファックス: 86-0535-668-1275

E-mail: lichen1129@yahoo.com.cn (中国語)

lcd0809@yahoo.co.jp (日本語)